

知的障害特別支援学校における 「指導と評価の一体化」について

学籍番号 (249503)

氏 名 (小森 友紀恵)

主指導教員 (湯浅 哲也)

副指導教員 (井坂 行男)

1. 背景 とこれまでの実践

第1章では、これまでの授業記録・実践資料をもとに、特別支援学校における「指導と評価の一体化」の実態を整理した。授業中の観察、口頭でのやりとり、支援の調整、TT（チームティーチング）による振り返りなど、日常的に行われている実践が形成的評価の要素を多く含んでいることが明らかとなった。

また、リフレーミング、クールダウン、支援のフェードアウトなどの行動支援の実践は、支援の有効性を見極める評価の視点を伴っており、「どの条件で・どの支援で・どの程度できるのか」という条件つきパフォーマンス評価が自然に行われていた。さらに、授業分析では、発問が複数の観点（知識・技能／思考力・判断力・表現力／主体的態度）を同時に含むことや、教材提示の調整が形成的評価として機能していることが確認された。

これらの知見から、特別支援教育における「指導と評価の一体化」は、明確に意識されていない場面でも成立しており、今後はこれらを体系化し、教員が自覚的に活用できる枠組みとして整理する必要性が示された。

2. フィールドワークの実践

第2章では、社会科単元「地域の歴史とくらし」におけるフィールドワークの実践を通して、形成的評価の具体的な姿を分析した。喜連環濠地域を歩く活動は、地理・公民・歴史の三領域を自然に横断する学習となり、児童生徒が地域の歴史的文脈を身体的に理解する機会となった。

発達段階に応じた3つの班に対して、同一教材を用いながら支援量を調整し、地蔵探し、ビンゴシート、地図活用、ミッションシートなどの課題を設定した。逐語記録からは、児童生徒の空間認知が「迷い→照合→修正→理解」へと段階的に深まる様子が確認され、役割遂行を通して主体的な学びが促進されていた。

アンケート結果からは、活動の難易度と歴史理解、理解と次の意欲の間に関連が見られ、特に「よくわかった」と回答した児童ほど「また歩きたい」と答えていた。これは、形成的評価が学習意欲の向上に寄与していることを示している。

また、役割分担による協働的な学びは、主体的態度の育成に寄与し、特別支援教育における構造化の効果が確認された。難易度の受け止め方には個人差があるものの、達成感や成功体験が意欲の向上につながることを示され、適切な課題設定と支援調整の重要性が明らかとなった。

さらに、フィールドワークという校外活動は、社会科の三領域（地理・公民・歴史）を自然

に横断し、学習指導要領が求める社会的事象への主体的な関わりを実現するものであった。これらの点から、本実践は「指導と評価の一体化」を具体的に示す事例であるといえる。

3. 「指導と評価の一体化」に関する

実習校の教員へのアンケート

第3章では、実習校の教員を対象に実施した「指導と評価の一体化」に関するアンケート調査の結果をもとに、現場教員がどのように形成的評価を理解し、どのような場面で活用しているかを明らかにした。特別支援学校では、児童生徒の特性に応じた支援が不可欠であり、授業中の観察や声かけ、支援の調整が日常的に行われている。しかし、これらの実践が「評価」として自覚的に位置づけられているかどうかは、教員によって大きく異なる可能性がある。本章では、教員の認識の差異や課題意識を整理し、特別支援教育における「指導と評価の一体化」の現状を考察する。

アンケートの結果、多くの教員が「授業中に児童生徒の理解度や反応を見て指導を調整している」と回答しており、形成的評価の実践が日常的に行われていることが確認された。一方で、「形成的評価」という語を明確に理解している教員は必ずしも多くなく、評価を「結果の判定」と捉える傾向も依然として見られた。特に若手教員や経験年数の浅い教員は、児童生徒の行動観察や支援の調整を「評価」として認識していない場合が多く、評価の概念が十分に共有されていないことが示唆された。

また、教員の多くが「できた／できない」の背景にある要因（発達、家庭、課外活動、指導の影響）を区別することの難しさを挙げていた。特別支援教育では、児童生徒の行動や学習成果が多様な要因の相互作用によって生じるため、単純に「指導の成果」として評価することが難しい。この点は、教員が評価に対して迷いや不安を抱く要因となっており、評価の枠組みを整理する必要性が浮き彫りとなった。

さらに、教員は「評価が指導改善にどのように結びつくのか」という点についても課題を感じていた。授業後の振り返りやTTでの共有は行われているものの、それが体系的な評価として位置づけられているわけではなく、個々の教員の経験や感覚に依存している部分が多い。アンケートの自由記述では、「評価の方法が曖昧」「形成的評価の具体例が知りたい」「評価を記録する仕組みが必要」といった声が多く寄せられた。

以上の結果から、実習校の教員は日常的に形成的評価を実践しているものの、その概念や方法が十分に共有されておらず、評価の自覚化・体系化が課題であることが明らかとなった。特別支援教育における「指導と評価の一体化」を推進するためには、教員が日々行っている観察・支援調整を「評価」として捉え直し、共通の枠組みとして整理する必要がある。

4. 総合考察

総合すると、特別支援教育における「指導と評価の一体化」は、特別な手法を新たに導入することではなく、既に行われている実践を評価の視点から捉え直し、学習過程を意識的に見取ることによって成立することが明らかとなった。今後は、こうした実践を体系化し、教員が自覚的に活用できる評価の枠組みとして整理することで、より質の高い指導と評価の一体化が実現されると考えられる。